

二〇一九年度春季企画展「時代のなかの大隈講堂」

寫 田 修

二〇一九年度春季企画展は、「時代のなかの大隈講堂」と題し、現在早稲田のシンボルとして知られる大隈講堂について、それぞれの時代のなかで早稲田の歴史とともに歩んだ姿をたどった。会期中の入場者数は、二、一八五人であった。

以下、展示会の概要と展示資料の一部を紹介する。

はじめに

大隈講堂（正式名称は、早稲田大学大隈記念講堂）は、一九二七年に開館し、以来九〇年以上変わらぬ姿で在りつづけている。早稲田に学んだ人々にとって、心のふるさとを体現した存在ともいえるであろう。しかし、講堂建設のいきさつや、設計・建築の実際、そして完成後にたどった道のりなど、大隈講堂をめぐる歴史は、その知名度に比し

大学史資料センター春季企画展

時代のなかの大隈講堂

2019年

3.22_[金] → 4.21_[日]

10:00～17:00 入場無料

休館日：4月10日(水)、17日(水)

主催：早稲田大学大学史資料センター 会場：早稲田大学歴史館 企画展示ルーム

チラシ表

講堂が刻む九十余年

左下: 大隈侯記念大隈講堂建築費全募款がスタート(1929年)
 右上: 早稲田大学大隈校長記念大隈講堂設計図(1929年)
 中央左: 高田早稲田敷地(1925年、当時早稲田敷地と呼ばれていた)
 中央右: 建築中の大隈講堂(1927年)
 右下: 大隈侯外遊イム(文芸春秋社蔵、大隈侯侯爵蔵)

早稲田のシンボルとして知られる大隈講堂。1927年の開館以後変わらず在りつづける講堂も、その歴史は起伏に富む。講堂なき時代から、大隈重信の没後その宿願を果たすべく建設がなされ、完成後は卒業・入学式をはじめ、講演や演劇、あるいは大学紛争など、さまざまな出来事のもと現在に至るまで——それぞれの時代のなかで、早稲田の歴史とともに歩んだ姿をたどる。

※展示資料は都合により変更となる場合があります。

大学史資料センター春季企画展 時代のなかの大隈講堂 (入場無料)

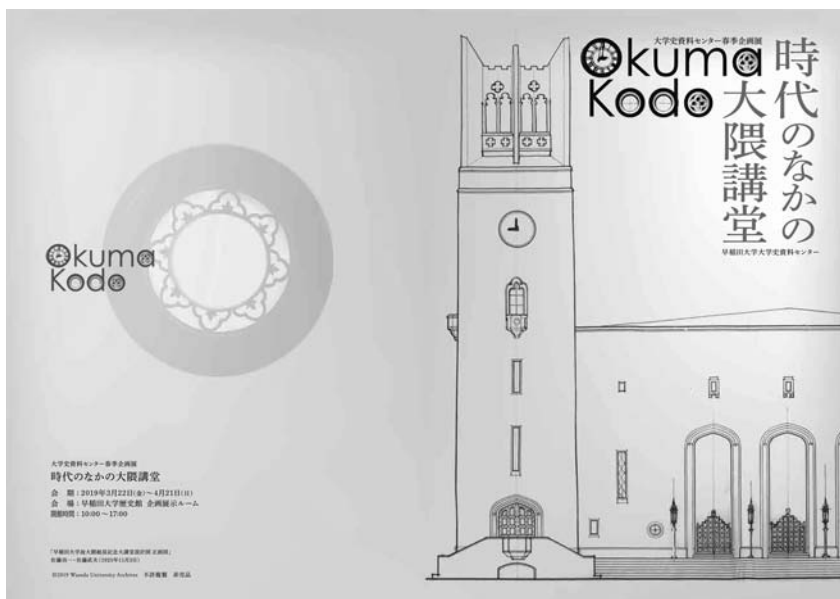
主 催：早稲田大学大学史資料センター
 会 期：2019年3月22日(金)～4月21日(日)
 会 場：早稲田大学歴史館 企画展示ルーム
 開館時間：10:00～17:00
 休館日：4月10日(水)、17日(水)

交通のご案内

東京メトロ東西線「早稲田」駅から徒歩7分
 都電荒川線(東京さくらトラム)「早稲田」駅から徒歩5分
 JR山手線・西武新宿線「高田馬場」駅(早稲田口)から
 都営バス早大正門行「早大正門」下車徒歩2分

お問い合わせ先
 早稲田大学大学史資料センター
 Tel.042-451-1343 E-mail:daigakushi-event@list.waseda.jp
<https://www.waseda.jp/culture/archives/>

万国旗で飾られた大隈講堂(1929年)



図録表紙・裏表紙

てそれほど知られてはいない。

本展では、早稲田の歴史とともにあった大隈講堂について、未だなき時代を含め、大隈重信の死をきっかけに建設計画が始まり、紆余曲折のなかで設計・建築がなされ、完成後はさまざまな出来事の「場」となり、早稲田のシンボルとなっていくさまを描き出した。

1 ッセンターとしての講堂を求めて——講堂なき時代——

早稲田大学の前身である東京専門学校が創立されたのは一八八二年である。もちろん、創立当初から大隈講堂があったわけではない。学校創立後、学生数の増加や組織の拡張にともない校舎は増えていったが、学生たちを一度に集めることができる「講堂」については、建設には至らなかった。大隈重信が一八八九年に寄進した大講堂も、キャパシティとしては十分ではなかった。また、一九〇〇年代はじめには、校舎増築の計画のなかで、「中央講堂を構内中央の大敷地に建設し以て早稲田大学全校舎の整頓を期せんとす」（第廿一回早稲田大学報告一九〇四年）という記録はあるが、実現はされていない。この時期、多くの人が集まる式典などの行事は、野天で行われるか、あるいは大学の中庭に天幕（テント）を張り、さしあたり雨露を凌いで開催されていた。

大隈重信は、晩年、「俺に屢々演説をさせるが、天幕の中や野天では困るではないか、俺も八十以上になって居るから家の中で演説をさせてくれないか」と語ったといわれている。もつともなことであるが、それとともに大隈は、「学校という共同体の中心は講堂である。（中略）総て物には中心がなくてはならぬ、センターがなくてはならぬ」（『始業式に臨みて』『早稲田学報』第三二五号、一九二二年五月）と、多くの人が集合・共同する力を重視し、大学にとって「センター」としての講堂を持つことの意義を力説した。

結局、大隈は講堂を見ることなく世を去った。しかし、その思いは周囲の人々に受け継がれていく。大隈の没後まもなく記念事業が計画され、講堂の建設が決定された。建設資金などの募金活動は、教職員をはじめ、在学生、校友、各地域の人々が関わるなど大規模なものとなった。大隈の死が求心力となり、事業が進められていったのである。

他方、講堂のデザインについては、理工学部建築学科出身の校友からの提案で懸賞募集が行われ、応募数は一四五点を数えた。当選三点、佳作六点など選考が行われたが、最終的にこれらの案は、隣接する庭園等との調和の関係で参考意見にとどめることとなった。

こうして、紆余曲折はありながらも、講堂建設への第一歩が踏み出された。

【主な展示資料】

・卒業証書授与式 一九一九年 早稲田大学大学史資料センター所蔵（以下、所蔵機関について記載のないものは同センター所蔵とする） 資料1

構内に設けた天幕（テント）で講演をする大隈重信。

・故大隈侯記念大講堂建設資金募集ポスター 早稲田大学故大隈総長記念事業部 一九二二年 ②は早稲田大学図書

館所蔵 資料2①②

記念大講堂建設資金募集の宣伝のため、広告研究会に依頼して作成したポスター。図案はともに理工学部建築学科教授の今和次郎による。

・小精廬雜載 市島謙吉 一九二三年四月十八日記 早稲田大学図書館所蔵 資料3

市島謙吉らが委員となった建築委員会が数回にわたって開かれ、講堂の形や建設地、図案の公募などについて議論されたという記述がある。

・『早稲田大学故大隈総長記念大講堂競技設計図集』 早稲田大学故大隈総長記念事業部 一九二三年 資料4①②③

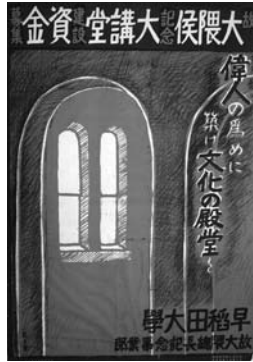
講堂のデザインについて、理工学部建築学科出身の校友から図案公募の提案があり、大学側もそれを採用した。



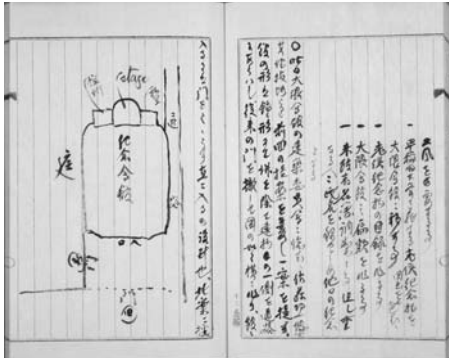
資料 1



資料 2 ②



資料 2 ①



資料 3

一四五点もの応募があり、当選三点、佳作六点などを決定した。ここでは一等から三等当選のものをあげる。

2 宿願をかなえる——大隈講堂の誕生——

講堂の建設に向け、建設資金の募集やデザインの検討などを進めていた矢先に、関東大震災が発生した。学内でも大講堂の倒壊や各学部の校舎の破損など被害は甚大であり、講堂の建設についても計画を中断せざるをえなかった。建設計画があらためて動き出したのは、震災から一年半ほど経った一九二五年四月であった。講堂の設計は、佐藤



資料4①



資料4②



資料4③

功一をはじめとする理工学部建築学科のメンバーによって進められ、仕切り直しとなったデザインは、当時助教授であった佐藤武夫が中心となり、数か月間で講堂全体の設計図や照明など各意匠の図面を書き上げた。その際、高田早苗から出された、「ゴシック様式であること」、「演劇にも使えるように」という意見も盛り込まれた。また、時計塔の高さは、大隈重信が唱えた「人寿百二十五歳説」にちなみ一二五尺（約三八メートル）としたことは、周知の通りであろう。デザイン（製図）のほかでは、構造設計を福島雅男（当時助教授）、衛生換気設備を大沢一郎（同前）、音響効果黒川兼三郎（同前）、電気照明を上田大助（同前）が担当し、そこに顧問陣として岡田信一郎、内藤多仲、吉田享二の各教授が名を連ねるかたちとなった。このように講堂の建設は、佐藤功一のもと、当時の建築学科の若手メンバーが中心となり再開されたのである。

他方、建設資金については募金の目標額への見通しがつき、一九二六年二月に工事が着工され、一年半後の一九二七年一〇月に無事竣工を迎えた。そして同月二〇日、創立四五周年記念式典とともに大隈講堂開館式が行われ、多くの人が講堂に集まり、亡き大隈重信を偲んだ。高田早苗は開館式に際し、「天にます みたまよしかと みそなはせもろ人つとひ きみしのふなり」（天上にいらつしやいます大隈老侯の御霊よ、しかとご覧ください。完成した講堂に多くの人がつどい、あなたのことを偲んでおります）と歌を詠んだ。ここに、積年の宿願が果たされたのである。

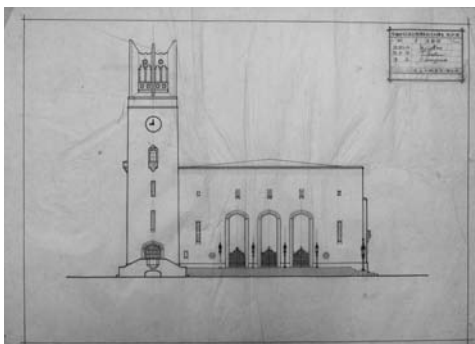
【主な展示資料】

・ 早稲田大学故大隈総長記念大講堂設計図 佐藤功一・佐藤武夫 一九二五年 資料5①②

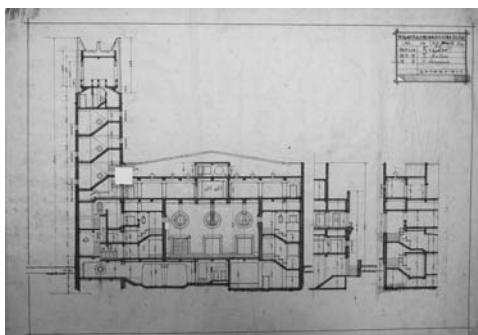
大隈講堂の設計図。佐藤功一（理工学部建築学科教授）のもと主に佐藤武夫（同助教授）が製図を担当した。図面作

成の際、総長の高田早苗からは、ゴシック様式で演劇もできるような講堂をという意見が出され、それを踏まえ

たデザインとなった。ストックホルム市庁舎を参考にしたともいわれている。また、時計塔の高さは、大隈重信が唱えた「人寿百二十五歳説」にちなみ、一二五尺（約三八メートル）としている。



資料 5 ①



資料 5 ②

～建設計画の再開～

大正十四年になって私は突如として恩師の佐藤功一教授から自分の傘下でこの大隈講堂のデザインを担当せよという、まさに青天のへきれきに似た命令を承ったのである。〔中略〕

高田〔早苗〕先生から承った御註文は「大学の建築はゴシック様式であってほしい」ということであった。更に「ワセダの大講堂は演劇にも使えるものであって欲しい。幸い坪内サン（坪内逍遙先生）も居ることだから、よく意見を聞いて貰いたい」という御注意の出たことも覚えている。

臨時の大隈講堂建築のための技術組織が出来、総帥佐藤功一教授（先生自ら総帥という言葉を持ち出された）の下で、佐藤武夫助教授がデザインを、福島雅男助教授が構造を、そして衛生換気設備を大沢一郎助教授が、電気照明設備を門倉則之助教授が、音響効果を黒川兼三郎助教授が、といった風に分担し、それに顧問陣として岡田信一郎、内藤多仲、吉田享二の三教授が控えるという構えで、この設計の仕事が始まったのである。

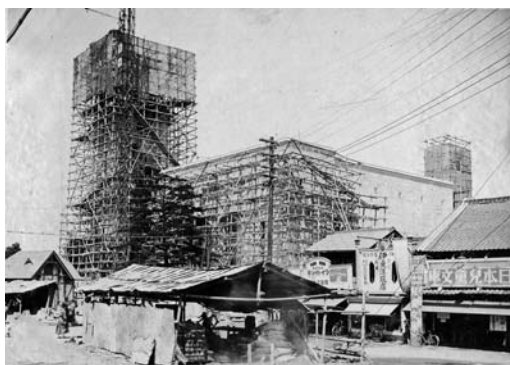
（佐藤武夫「大隈講堂の出来る頃」『早稲田学報』第六九四号、一九五九年九月）



資料 6 ②



資料 6 ①



資料 6 ③



資料 6 ④

・記念大講堂工事進行アルバム 一九二七年 資料 6 ①②③④⑤⑥
 全六冊のアルバムには、二〇〇枚以上の工事写真が収められ、講堂建設の過程が詳細に記録されている。



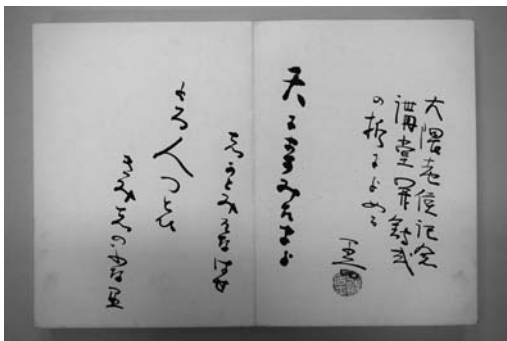
資料 6 ⑤



資料 6 ⑥



資料 7



資料 8

・万国旗で飾られた大隈講堂 一九二七年 資料 7
 無事竣工を迎え、一九二七年一〇月二〇日、創立四五周年記念式典とともに大隈講堂開館式が行われた。
 ・高田早苗短歌（高田早苗他書画帳）一九二七年） 資料 8
 大隈講堂の開館に際して高田早苗が詠んだ歌。大隈重信の宿願を果たした高田の思いがこめられている。

3 さまざまな「場」として、シンボルとして——講堂が刻む歴史——

講堂の完成以後、そこでは入学式・卒業式をはじめ、講演や演説会、映画や演劇、教員の最終講義など、さまざまな行事が行われた。また、学内外の冊子などに講堂が描かれることで、早稲田をあらわすモチーフのひとつとなった。講堂が表紙を飾る本やパンフレットを一度は目にした人も多いと思われる。また、受験雑誌などでも講堂は取り上げられ、早稲田を目指す人にとっても、早稲田＝大隈講堂というイメージがつくられていった。

一方、大隈講堂は、各行事の会場であるとともに、そこで起きたさまざまな出来事を通して、早稲田の歴史を刻む「場」となっていく。すなわち、各種講演会や大学紛争など、それぞれの時代において早稲田にとって歴史の意味をもつ出来事の舞台となった。そして、それらの「経緯」を経て、大隈講堂は早稲田のシンボルとなっていくたのである。いくつかの例を挙げるとすれば、坪内逍遙の最終講義（一九二七年）、ロバート・F・ケネディの講演・討論会（一九六二年）、大学紛争時（第二次）における革マル派の占拠と警察による封鎖解除（一九六九年）、森繁久彌の公演「屋根の上のヴァイオリン弾き」（一九八一年）など、それぞれの時代のなかで、早稲田の歴史にとって大きな出来事が、講堂を舞台にして起きている。

【主な展示資料】

・坪内逍遙最終講義 一九二七年 早稲田大学演劇博物館所蔵 資料9

一九二七年二月一日・一六日の二日間にわたって、坪内逍遙の最終講義（シエークスピア講義）が行われ、学

～坪内逍遙最終講義～

出版部の二階から、群衆の大隈講堂へ殺到する物凄まじいありさまを見た私は、急ぎ足で駆けつけた。時刻のまだ早かったため私は、演壇のすぐ下の第一列の座席を占領して静かに開会を待つことが出来た。〔中略〕教職員席は、われらの同僚の来ない前に婦人席から溢れ出る潮の如き娘子軍によって、占領されてしまった。〔中略〕

正三時から始まった博士の講義は、既に予定の五時を過ぎた。博士は、丁寧にも、「御都合のある方々はお構いなく…」と言われたが、満堂数千の男女は、誰れ一人として動こうとするものはなかった。それから更に一時間、前後三時間に亘れる大講演は、丁度六時を以て終った。

（青柳篤恒「坪内博士の最終の講義を拝聴して」

『早稲田学報』第三九五号、一九二八年一月 より）



資料9

～講堂の占拠と封鎖解除～

昭和四四年九月三日、大隈講堂前広場。大学立法反対を契機とする第二次早大紛争の過程で、第二学生会館が全共闘派によって、そして大隈講堂が革マル派によって占拠されており、この日機動隊による封鎖解除が行われることになっていた。私は固唾をのんで佇んでいたのだった。〔中略〕

早稲田の象徴である大隈講堂への占拠と実力排除、そして強迫としての大学立法等をめぐる問題は錯綜していたのであり、また、ある立場から愛護の対象であるものが、それ故に解体の目標となる考え方が、その当否は別にして、あることを知らなかったわけではない。だが、共同体のシンボルとそれを担う建築が、様々な思想的立場が交錯する力学的場において、どんな危うさにさらされるものであるかを始めて知ったように思う。大袈裟に言えば私にとっての敗戦体験だったのかもしれない。幸いにも大隈講堂は炎上しなかった。〔中略〕しかし私には時々真空地帯のような亀裂が走ることもある。無上の愛惜としての大隈講堂とともに、昭和四四年九月三日の記憶を私は忘れないだろう。

（中川武「大隈講堂（大学キャンパスにおける早稲田建築）」

『早稲田建築 特別記念号』一九九一年一月 より）



資料10

内の教職員や学生をはじめ、他大学の学生、新聞や雑誌の記者など多くが聴講した。青柳篤恒の言葉の通り、前列に多くの女性の姿が見える。なお、本講義が早稲田大学における最終講義の嚆矢といわれている。

・大隈講堂占拠（一九六九年） 資料10

革マル派によって占拠された大隈講堂。垂れ幕が下がり、屋上には人影が見える。警察によって封鎖は解除されたが、講堂内部は、バリケードとするために椅子が壊されるなど、什器・備品の破損もはげしかった。

おわりに

時代を経てキャンパスの整備がされるなかでも、講堂の位置づけは変わらない。一九五七年に戸山キャンパスに記念会堂（現在は「早稲田アリーナ」に姿を変えている）が完成してからも、著名人を招いての講演会など、重要な舞台としての役割は変わっていない。一九九九年には東京都選定歴史的建造物に、二〇〇七年には国の重要文化財に指定され、大隈講堂は今も早稲田の歴史とともに歩みつつづけている。

※本展示の図録は、大学史資料センターのウェブサイトにて閲覧が可能である。ウェブサイトのURLは左の通り。

<https://www.waseda.jp/culture/archives/>

大隈講堂に登壇した人々

年	月・日	演者	演題・内容
1927年	10月20日～22日	金子馬治／浮田和民／五十嵐力／塩沢昌貞ほか	大隈講堂閉館記念大講演会(各学科の教員による記念講演)
	12月15日・16日	坪内逍遙	シェークスピア講義(最終講義)
1928年	1月20日	新渡戸稲造	西洋の事情と思想
1931年	10月28日	中野正剛	満州事変に直面して
1935年	1月31日	菊池寛	日本英雄論
1937年	4月29日	ヘレン・ケラー	私の住む世界
	12月15日	會津八一	北支と文化史学研究
1938年	2月14日	田中穂積	長期交戦と学徒の態度
1943年	1月20日	藤田嗣治	絵描の観たる大東亜戦
1946年	11月12日・14日・16日	津田左右吉	学問の本質・学問の立場から見た現時の思想界・学生と学問
1947年	10月28日	大山郁夫	帰国歓迎大会での講演
1951年	5月8日	小川未明	日本芸術院賞受賞記念文芸講演会での講演
1956年	10月26日	湯川秀樹	原子物理学の趨勢
1957年	10月7日	バンディット・ジャワハルラル・ネルー(インド共和国首相)	明日を創るもの
1959年	6月16日	アハマド・スカルノ(インドネシア大統領)	世界平和と民族の独立
	10月9日	石橋湛山	中国に招かれて
1962年	2月6日	ロバート・F・ケネディ(アメリカ合衆国司法長官)	R・K歓迎委員会主催講演・討論会
1964年	9月9日	大佛次郎	文芸随想
	9月24日	桑原武夫	日本における近代とは何ぞや
1979年	10月13日	ヘルベルト・フォン・カラヤン	早稲田大学交響楽団を指導(公開練習)
1980年	10月20日	丸山眞男	大山郁夫生誕百周年記念講演会での講演
1981年	5月25日	森繁久彌	屋根の上のヴァイオリン弾き(公演)
1982年	10月30日	松本幸四郎／中村吉右衛門	勸進帳(公演)
1986年	11月12日	コラソン・コファンコ・アキノ(フィリピン共和国大統領)	名誉博士学位贈呈式における記念講演
	5月20日	松本清張	大隈重信をめぐって
1988年	10月20日	司馬遼太郎	文明と文化について
	5月17日	山田太一	現実観をめぐって
1991年	5月11日	島田正吾	ひとり芝居「白野弁十郎」
1993年	7月7日	ビル・クリントン(アメリカ合衆国大統領)	講演と対話の会
1994年	3月25日	金泳三(大韓民国大統領)	新しいアジア、新しい世界の設計
	7月11日	ジム・ラベル(元アポロ13号船長)	宇宙からの生還
	10月19日	淀川長治	私が映画から学んだこと
1995年	7月4日	ネルソン・R・マンデラ(南アフリカ共和国大統領)	名誉博士学位贈呈式における記念講演
1997年	3月27日	マハティール・ビン・モハマド(マレーシア首相)	アジアの未来と日本の役割
1998年	11月28日	江沢民(中華人民共和国国家主席)	歴史を鏡として、未来を切り開こう
2004年	10月14日	養老孟司／大江健三郎	日本人の生き方

※2000年頃までの講演会を中心に、そのごく一部を収録した。敬称略。()内の肩書きは当時のもの。